

『英草紙』第九篇における高師直像の成立

――並木宗輔の太平記物浄瑠璃との関係をめぐって――

王 順 鑫

要 旨

都賀庭鐘の手による『英草紙』は、日本近世における中国白話小説の最初の翻案作で、読本の嚆矢とされる。『太平記』と密接な関係があることも、『英草紙』の特徴の一つである。『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」は『古今小説』巻九、『今古奇観』巻四に収録された「裴晋公義還原配」という裴度の善行話を翻案したものである。庭鐘は粉本の流れを受けて高師直を裴度に当てて翻案した故に、結果的に高師直の善行話を書き出した。とは言え、『太平記』諸本における高師直は悪逆無道な人物である。つまり、『太平記』から『英草紙』までは、悪玉から善玉へとという高師直像の反転が見える。従来の研究は、それを庭鐘による改編として指摘してきた。しかし、『英草紙』以前に、高師直を善玉として造型した作品が既にあつた。それは並木宗輔の手による浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』と『狭夜衣鴛鴦劍翅』である。本稿は、『英草紙』第九篇における高師直像の反転問題とその研究状況を踏まえて、並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』と『狭夜衣鴛鴦劍翅』という新しい出典の可能性を示し都賀庭鐘の翻案ぶりを考察した上で、今後の課題を見据えて、日本近世の中国白話小説受容史における太平記物の意義と位置付けの問題を提示したい。

はじめに

日本近世中期において、中国白話小説の内容を日本の文化環境に移植する「翻案」を基本的方法とする、浮世草子のマンネリを打破する新しい小説ジャンル「読本」が誕生した。その誕生に方法論的に大いに寄与したのは「読本の祖」とされた都賀庭鐘である。一九一二年に山口剛氏が論文「読本の発生」において、「庭鐘の四著(『英草紙』『繁野話』『莠句冊』『垣根草』)は多く支那の小説の翻案といふべきである」⁽¹⁾と基本的な翻案ぶりを指摘して以来、都賀庭鐘が如何に作品に和漢の知識を書き込めて翻案したかについては、数多くの研究者が緻密な典拠論を中心に研究を進めてきた。その中でも、『英草紙』(一七四九年序)が大いに注目されてきた。

『英草紙』は読本の嚆矢とされて読本の成立を考察する上で重要な作品である。その中に収録された九篇の作品の多くは『古今小説』『警世通言』などの中国白話小説の話を日本風に翻案した作品である。特に、『太平記』と密接な関係を持つことも『英草紙』の特徴の一つとして認められている。『英草紙』全九篇のうち、第一・三・五・七・九篇の背景設定或いは人物設定は『太平記』と深く関連している。丸井貴史氏の説を借りて言えば、読本は中国白話小説を翻案することによって出発したジャンルであれば、『太平記』を踏まえることによって出発したジャンル⁽²⁾でもある。それ故に、『英草紙』と『太平記』との関係は重要視すべき問題となる。その問題について、先学諸氏がすぐれた検証と考察をしてきたが、その関係の実相について未だに一考に値するところは残されている。本稿は『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」における高師直像の反転問題とその研究状況を踏まえて、新しい出典の可能性を示した上で、都賀庭鐘はどのような『太平記』関係資料を利用したか、如何に利用したかなどの問題について、

若干の考察を試みる。

一、高師直像反転の問題

『英草紙』第九篇「高武藏守婢を出だして媒をなす話」は『古今小説』巻九、『今古奇観』巻四に収録した「裴晋公義還原配」を翻案し、舞台を『太平記』の一時期に置き、高師直の一逸話として成立させたものである⁽³⁾。論述に先立ち、粉本である「裴晋公義還原配」と「高武藏守婢を出だして媒をなす話」の梗概を以下に掲げておく。

「裴晋公義還原配」…裴度という少年は、他人の三条の宝帯を拾い、自分のものにせず、所有者に返すことで、餓死した相は変えて、富貴の相となる。その後、戦功によって晋国公という高位に至る。平和で皇帝も仏教に傾倒して宮殿を立てるなどの為に、大いに金を費やす。裴晋公はそれに対して何回も諫言するが、聞き入れられない。裴晋公は重い権勢で人に妬まれ禍を生む危険があると反省して、激流勇退して酒色にふけるようになる。裴晋公の機嫌を取るために、各地の長官は当地の美女を求め、裴晋公の下に送る。唐壁と婚約がある黄小娥もその中の一人である。南方で官職についた唐壁は任期満了で都に登り昇進すべき時に、故郷に帰って初めてそのことを知る。裴晋公の権勢に怯えて、唐壁は仕方なく長安に行つて榮転を受けるが、海賊に出会い金も任命書も奪われてしまう。困窮する唐壁は一応都に帰り、旅店で悩んでいる時に、紫衣の老人に話しかけられる。実情を聞くと、紫衣の老人は自分が裴晋公の家来で彼を助けられると言い、また明日にこの辺りに来ると唐壁と約束して帰る。翌日、老人を待っている唐壁は二人の官人に裴晋公の邸宅に連れられる。その時に唐壁は昨日の紫衣の老人

が裴晋公であることを知る。裴晋公は仲介人として、唐壁と黄小娥との結婚式を完成させ、旅費を出し夫婦二人を任地に下らせる。

「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」…武蔵守師直は幼少の頃、旅行の僧に出会い、「貴人の相はあるが、良い結果は得難い相もある故に、功名を立てるが、その位置に久しく居られない。しかし、久しくいられないと、大事業は成功しない」と言われる。高師直は気にせずに、功名を立て続けて高位に至る。天下が幕府によって一統された後、尊氏は仏教に傾倒するようになる。高師直は諫言するが退けられる。重い権勢で人に妬まれ禍を生む危険があると反省して、高師直は激流勇退して酒色に耽るようになる。高師直は美女を集めて、諸大名・諸国守にも依頼して美妾を迎え入れる。高師直の機嫌を取るために、各地の長官は当地の美女を求め、高師直の下に送る。額田次郎左衛門と婚約がある勝子もその中の一人である。若気の至りで他国へ去った額田次郎左衛門は帰国してそれを知って、不面目と思ひ都に出世の機会を探しにいく。ようやく出世した額田次郎左衛門は足利直義の分地、備前の郡吏に任命されるが、海賊に出会い金も任命書も奪われてしまう。その後、額田次郎左衛門は西の京の先住した茶店に懇願して泊めてもらう。ある日、茶店で悩んでいる時に、とある年老いた侍に話しかけられる。実情を聞くと、侍は自分が高師直の家来で彼を助けられると言い、また明日にこの辺りに来ると額田次郎左衛門と約束して帰る。翌日、侍を待っている額田次郎左衛門は二人の武士に高師直の邸宅に連れられる。その時に額田次郎左衛門は昨日の年老いた侍が高師直であることを知る。高師直は仲介人として、額田次郎左衛門と勝子との結婚式を完成させ、旅費を出し夫婦二人を任地に下らせる。

「裴晋公義還原配」において、裴晋公像には「主上の無道に能く諫言できる」、「主上に信頼されないようになった時

に急流勇退する」、「本意ならず奪ってしまった他人の婚約者を帰す」という善玉のイメージが強く見える。都賀庭鐘はその流れを受けて、高師直を裴晋公に当てて翻案した⁽⁴⁾。故に、「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」における高師直も善玉として描き出されることとなった。しかし、従来本話の出典の一つと考えられている『太平記』における高師直は決して善玉と言えるものではない。例えば、谷垣伊太雄氏によれば、全体から見れば『太平記』は悪逆無道の高師直像を中心として叙述を展開した⁽⁵⁾。和田琢磨氏も『太平記』諸伝本の巻二一「塩治判官讒死事」における高師直に関する叙述を収集考察した上で、その章段で諸本は合戦の経緯についての順序に大きな差異が見えるものの、高師直批判という基本線が破られていないと指摘している⁽⁶⁾。その問題について、青木晃氏、武田昌憲氏などの先学も同じ見方を持っている⁽⁷⁾。『太平記』における高師直悪行譚の詳細は先学達の論に譲るが、ここで一例のみを取り上げて見ていきたい。

『太平記』において、高師直の悪逆無道が最も描かれる場面と言えば、巻二一「塩治判官讒死事」である。「塩治判官讒死事」は佐々木塩治判官高貞の滅亡事件を詳細に語っている。高師直が塩治判官の妻の話聞き、見ぬ恋に憧れる。挙げ句の果てに、高師直が高貞妻の湯上り姿を見て恋の病に取りつかれる。彼女を奪うために、高師直が足利尊氏・足利直義に高貞が謀反を図ると讒言する。それを聞いた高貞が妻子と別々に都に落ち、出雲へ下る途中で追手に追いつかれて哀れな最期を遂げるという。この一話の中に、塩治判官の妻を横恋慕する・意欲的に人妻を奪う・讒言で塩治判官一家を殺すという高師直の悪玉像が明白に描出されている。それに対して『太平記』の語り手は以下のよう

是を見聞人毎に、「さしも忠有て咎無りつる塩治判官、一朝に讒言せられて、百年の命を失つる事の哀さよ（中

略)。」と云ぬ人はなし。それより師直悪行積て無程亡失にけり。「利人者天必福之、賊人者天必禍之」と云る事、真なる哉と覺へたり。(『太平記』卷二「塩冶判官讒死事」)

『太平記』の語り手は「見聞人」の立場を借りて塩冶判官に同情を持ちながら、高師直の悪逆無道を痛烈に批判している。それも高師直の悪玉像を完成させるための一環にほかならない。つまり、高師直の悪玉像を強く印象付ける筆の取り方が『太平記』に読み取れる。このように、『太平記』から『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」までは、「悪玉」から「善玉」へという高師直像の反転が明らかに捉えられる。

二、高師直像反転の問題に関する先行研究

「悪玉」から「善玉」へという高師直像の反転について、先学諸氏は如何に解釈してきたかと言えば、最初に山口剛氏は左のように指摘している⁽⁸⁾。

裴晋公は即ち唐の宰相裴度である。庭鐘はどうして師直を以てこれに擬したのであろう。師直の名は屢操に歌舞伎に、敵役として用いられている。庭鐘が義を守り情を解する者にとり扱うのは、史実によったのであろうかそれとも異を樹てるためであらうか。或は原書を移す時に、漫に師直を当てたのであろうか。(中略)庭鐘はただ翻案の便利のために、史上の人物を意に任せて傀儡とする。決して史に隠れたところを闡明せんとするのでなかった。前の師直の如きもそれである。いわば浄瑠璃、歌舞伎が、史上の人物を勝手に改作すると同一の手段であらう。

氏の論には師直が屢々歌舞伎に「敵役」として用いられたことが言及されている。且つ、氏によれば、高師直像の反転は都賀庭鐘が「史上の人物を意に任せて傀儡と」して「勝手に改作」したことに起因したものであり、都賀庭鐘が高師直を「義を守り情を解する者にとり扱」ったのはただ「翻案の便利のため」の改編である。

続いて、『英草紙』を緻密に校注した中村幸彦氏も高師直を裴晋公に当てるという都賀庭鐘の執筆方法に注目している。氏の解題に、高師直像の反転について次のように言及されている⁹⁾。

この編で注目すべきことは、『太平記』を愛読書とした彼（都賀庭鐘）ではあるが、裴晋公に相当する人物として、そこから高師直を見出した彼の眼力である。あれほど登場人物の多い『太平記』であるが、今日的にみても師直は第一級の小説的人物である。師直を主人公とした小説が、その後といえども、ほとんどあるまいと思われるし、僅かに存在しても、その人物像は演劇方面の解釈に従っているようである。

「演劇方面」とは近世の『仮名手本忠臣蔵』を代表とする、高師直を悪玉として造型した演劇作品群を指すと考えられている。言わば、高師直を悪玉とした当時の演劇作品群に比べれば、高師直を善玉とした『英草紙』第九篇の独自性が認められて、その独自性が都賀庭鐘の改編によるものと理解されているようである。

その後、井上泰至氏はその問題について以下のように論じている¹⁰⁾。

庭鐘の軍書に対する態度は、俗説とおぼしきものには、距離をとりつつ、一方で積極的に虚構の一つとして取材するというものである。後者の典型的な例は『英草紙』第九話「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」である。

本作、『太平記』では悪玉として名高い高師直の意外な名將・善人ぶりを描く異色の作品である。(中略)歴史上「敵役」となる人物は、きわだった悪人として造型されることが多い。ただし、語り伝えられる過程で、(中略)極悪人が実は大変な英傑だったのではないかという反転を生む場合も出てくる。(中略)庭鐘の想像力もある意味これと近いと言ってよいだろう。

氏は『英草紙』第九篇における高師直像の反転を本話の異色としながら、それを都賀庭鐘の「想像力」による改編と指摘している。後に、『英草紙』の研究史を整理した丸井貴史氏も先学達の考えに従い、「本話の特異な点のひとつは、従来悪人として描かれることの多かった高師直を、善人に仕立て直していることである」⁽¹⁾と述べている。このように、先学諸氏は『英草紙』第九篇における高師直像の反転を問題視したが、殆どそれを都賀庭鐘の改編によるものとして認識してきた。

その結論を検証するために、都賀庭鐘の周辺にあった高師直関係作品を悉く検討する必要がある。しかし、加美宏、田中正人両氏が「太平記享受年表」を整理した時に、「ただ近世の草子・小説、演劇・芸能、随筆・日記、紀行・地誌、詩歌・俳諧、などについては、調査不十分と紙幅の都合上、殆ど収録出来なかった」⁽²⁾と述べているように、近世における『太平記』の「大普及」⁽³⁾がもたらした『太平記』関係書・派生作・舌耕文芸の流行は認められているが、その享受例の全般を整理することは難しい。それ故に、都賀庭鐘の周辺にあった高師直関係作品を悉く検討することも殆ど不可能となる。とは言うものの、その問題を説明する為す術がないとも言えない。手掛かりとなるのは、近世における『太平記』巻二「塩冶判官讒死之事」に取材した作品群である。

三、「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」と並木宗輔の太平記物浄瑠璃との比較

『太平記』巻二「塩治判官讒死之事」は、それ自体で完結性を持った一物語として太平記から切り離して鑑賞することが可能であり、近世初期から中期にかけて、それに取材し再創造した作品が多く見える。前述のように、「塩治判官讒死之事」は『太平記』における高師直の悪玉像が最も描かれる一話と言える故に、その物語に対する取材方法には、高師直という人物に対する態度がそれなりに反映される。それと「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」に現れた高師直に対する態度とを対照比較すれば、異同が明らかになり、作品間の影響関係の有無を考察することも可能となるはずである。

大橋正叔氏¹⁴と黒石陽子氏¹⁵の研究によれば、『英草紙』以前に、「塩治判官讒死之事」に取材した作品は下表の通りである。

作品名	ジャンル	出版／初演時間	出版元／出演元
さよごろも付ゑんや	御伽草子	近世初期か	未詳
小夜衣	謡曲	未詳	未詳
太平記さざれ石	歌舞伎	一七二〇（宝永七年）	京都夷屋座
硝後太平記	歌舞伎	一七二〇（宝永七年）	京都夷屋座

基盤太平記	浄瑠璃	一七二〇（宝永七年）	大坂竹本座
傾城伝授紙子	浮世草子	一七一〇（宝永七年）	八文字屋八左衛門版
兼好法師物見車	浄瑠璃	一七一〇（宝永七年）	大坂竹本座
忠臣略太平記	浮世草子	一七二二（正徳二年）	江島屋市郎左衛門版
今川一睡記	浮世草子	一七二三（正徳三年）	中島又兵衛版
西海太平記	浮世草子	一七二三（正徳三年）	中島又兵衛版
南北軍問答	浄瑠璃	一七二五（享保十年）	大坂豊竹座
尊氏將軍二代鑑	浄瑠璃	一七二八（享保十三年）	大坂豊竹座
狹夜衣鴛鴦劍翅	浄瑠璃	一七三九（元文四年）	大坂豊竹座
仮名手本忠臣蔵	浄瑠璃	一七四八（寛延元年）	大坂竹本座

その中の多数は高師直を悪玉としたものであるが、『尊氏將軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦劍翅』がそれらと全く異なる立場で高師直像を造型した。『尊氏將軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦劍翅』は共に並木宗輔の手による太平記物浄瑠璃である。それぞれ一七二八（享保十三年）年と一七三九（元文十三年）年に大坂豊竹座で初演された。『尊氏將軍二代鑑』においては、高師直は足利直義に仕えた忠臣であり、主君直義の反逆の悪心を収めるために尽力して、最後は主君に諫められなかったことを謝罪して切腹する。『狹夜衣鴛鴦劍翅』においては、高師直は足利尊氏に仕えた忠臣であり、尊氏を滅ぼし天下を独占しようとした足利直義を阻止するために、計略をめぐらす。つまり、両作ともは従来『太平記』

に描く悪玉の高師直像を反転させた作品と言える。『太平記』に描く高師直像が史実と必ずしも合致しない故に、その両作の成立には正に並木宗輔の歴史に問いかけて一貫している姿勢が窺える⁽¹⁶⁾。

従って高師直像の反転という点において、『尊氏將軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」との共通性が見える。そのような立場で高師直像を描く作品は疑いなく当時の少数派と言えるが、そのみで『尊氏將軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」との間に影響関係があると断言すれば、いかにも短絡的にすぎる。「悪玉から善玉へ」の反転という点に共通しているとは言っても、「善」という抽象的概念には基準は様々である。それ故に、同じく「善玉」と言えるが、結果的に全く異なる人物像が出てくることもありうる。換言すれば、「善玉」の造型には様々な執筆方法がある。影響関係の有無を考察するには、その「善玉」の執筆方法を検討しなければならない。以下に『太平記』における高師直像を参照軸としながら、前述の三つの作品における高師直像の執筆方法を比較することにより、「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」の新しい出典の可能性に迫る。

第一、高師直像の反転の側面として、『尊氏將軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」のいずれにも、逆臣から忠臣へという反転方法が見える。前述のように、『太平記』には高師直は逆臣として造型されている。例えば、『太平記』巻二十七「左兵衛督欲誅師直事」「御所困事」には、將軍足利尊氏と政務を取り仕切る足利直義両者の間に利害対立が頻発し、足利尊氏に仕えた高師直と足利直義との対立関係が次第に深まっていき、幕府を二分する権力闘争へと発展していく。やがて、政敵となった足利直義側近の上杉重能・畠山直宗らの讒言によって執事職を解任された高師直は、挙兵して京都の足利直義邸を襲撃する。さらに足利直義が逃げ込んだ足利尊氏邸をも包囲し、足利尊氏に対して足利直義らの身柄引き渡しを要求する事態に発展する。最後に、足利尊氏の斡旋によっ

て高師直は足利直義との和議を結んだものの、足利直義を出家させて引退へと追い込むという。その一話に、悪逆無道な高師直の逆臣像はリアルに描き出されている。

それに対して、『尊氏將軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦劍翹』と「高武藏守婢を出だして媒をなす話」には高師直は忠臣として造型されている。

『尊氏將軍二代鑑』においては、高師直は足利直義に仕えた忠臣である。例えば、大塔宮の人面瘡を患った足利直義に高師直は見舞いをしようとするが、足利直義は病の正体を他人に知られたくない故に断固拒否し、手討にするぞと高師直を脅かす。その時、師直は次のように答える。

但命はおしうないかといはせも果ずあざ笑ひ。和殿は命がおしき故武士の作法を忘れじな。武家に生まれて主君の為。命を果すは戦場も畳の上も同じこと。お手討にあへばとて。御病氣を何病と弁ざるは不忠の臣。(『尊氏將軍二代鑑』第二)

高師直は自分の命を主君直義のために生まれたものとし、忠臣として死んでも主君直義の見舞いをする決意を表すという。つまり、『尊氏將軍二代鑑』においては、高師直は忠臣の行為規範で実践している。もう一例を上げて言えば、物語の最後に、足利直義は足利義詮政権を倒すために反逆を計画するが、義詮に討伐される。高師直はその反逆行動に参加せずに、直義の城を陥落させた義詮に左のように直義のために許しを求める。

此度直義の反逆は。伊賀守がすすめにより。又は右大臣具親が。かほよの前に心を懸。媒を頼みしより主人本

心を失なへり。天子は是をしろし召れず。直義計の悪逆とて逆鱗はぜひもなし。今日の軍には某後話をなさんと偽り。直義の心を徴。一命を乞受んと刃向ひ申さぬ此出立。右大臣と伊賀守。かれら二人を討取て。主人は助け給はれと涙と。『尊氏將軍二代鑑』第五)

高師直は主君直義の行動を佞臣の鼓惑に起因するものとして、今回の事で直義の心も懲りると、涙ながらに義詮に直義を容赦するように頼み込むという。その後、義詮は高師直の話を聞いて感心して、師直の忠義を褒めて直義を殺さないことにする。それを聞いた高師直は左のように行動する。

直義を助けんと。聞くより師直刀を抜。腹にぐつと突立る。こはそも狂気か何故と。の給ふ姿を頭で三拝。主君を助くる御厚恩。お礼を申す詞はつきず。我は主人を諫ぬ不忠。仮にもかほよに不義云かけ。(中略) 一方ならぬ大罪人。我相果なば直義の。本心を引おこす。『尊氏將軍二代鑑』第五)

高師直は義詮に感謝して、主人に諫言できなかったことを謝罪し、自分の死で直義の悪心も収められるとして切腹するという。敵である義詮までが褒めている章段、また主君直義の罪を自分のせいにして彼の悪心を収めるために切腹する章段により、『尊氏將軍二代鑑』における高師直の忠臣像は余すことなく彫り出されている。

『狭夜衣鴛鴦劍翹』においては、高師直は足利尊氏に仕えた忠臣である。前述のような具体的な例は抽出できないが、以下にその物語の梗概に従って、高師直像を説明する。新田義貞の持っていた名刀・鬼切丸の錦の袋の内側には、足利追討の南朝の綸旨が入っている。北国に居を構える義貞の弟・義助の拳兵の正当性を得るには、これが必要であ

る。義貞の家臣であつた塩谷判官は、これを目的として足利直義に投降するふりをする。淫楽に耽つた足利直義は塩治に心を許し、兄足利尊氏を討ち亡ぼし天下を独占する謀反の企みを明かし、仲間を引き入れようとする故に、鬼切丸を塩谷判官に渡すが、刀は戻されど錦の袋がついてない。実は高師直は新田義貞を討ち取つた時に、最期を遂げた新田義貞に編旨の入つた錦の袋を義貞の妻勾当内侍に渡すと頼まれる。高師直は塩谷判官の妻・かほよに恋煩いになり、彼女を奪うが、それはかほよの正体が勾当内侍というあたりをつけたからである。勾当内侍に錦の袋を渡す高師直は、彼女から足利直義の反逆陰謀を聞いて、それを阻止するために計略を張り巡らす。則ち、『狹夜衣鴛鴦劍翹』においても、高師直は主君足利尊氏の統治を守るために、足利直義の謀反の企みを破壊する忠臣として描かれている。「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」においては、天下が幕府によって一統された後に、尊氏は仏法を信仰し、数知らずの財宝を寄付して施す。高師直はこれを諫めて、左のように進言する。

戦闘暫く穏かなれども、国家多事、宜敷く不虞に備ふべし。漫に金銭を費すの時にあらず。(『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」)

治世が安定したばかりである故に、不測の事態に備える為に寺院に財物を寄付すぎるべきではないと、高師直が足利尊氏に諫めるといふ。「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」においても、高師直は主君足利尊氏の無道に諫言することができるとして描いている。

このように、『太平記』には高師直が主君足利尊氏の邸宅を包囲し、足利尊氏に対して足利直義らの身柄引き渡しを要求するような逆臣として造型されているのに対して、『尊氏將軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だ

して媒をなす話」には、高師直は忠臣として造型されている。『太平記』から上述三つの作品までは、高師直像に「逆臣から忠臣へ」という反転が見える。

第二、『尊氏將軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」のいずれにも、人妻横奪事件の解釈上の反転が見える。前述のように、『太平記』巻二「塩治判官讒死事」には、高師直は意欲的に塩治判官の妻かほよを奪おうとする物語が記されて、彼の好色ぶりは明らかに描かれている。則ち、『太平記』における高師直の人妻横奪行為は私的欲望に起因する主観的惡意的行為である。それに対して、『尊氏將軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」は、人妻横奪事件を不本意的行為としてその正当性を解釈しながら、高師直の善後策をも書き加えている。

『尊氏將軍二代鑑』においては、高師直は塩治判官の妻かほよに恋慕し、彼女を奪って自分の館に連れ帰る。その行為の理由について、高師直はかほよに左のように解釈する。

おのれさ程の縁あらば。かほよをめとりあまつさへ。直義に塩治が家を退転させしはいかに。さあ此いひわけなんと。を汝しらずや。右大臣具親かほよ姫に心をかけ。うばひ来らば將軍職の綸旨をなさんと。主人直義と内談。そばには佞人伊賀守すすめ上る惡逆。某が諫言もとどかず。とかく此女をいたづら者にしそれがしが手にいらば。將軍職の望みもかなはず。おのづから惡きやくもやむ道理。(『尊氏將軍二代鑑』第三)

高師直が塩治判官の妻かほよに横恋慕し奪ってくるふりをするのは、かほよを右大臣具親に渡さないための手立てである。かほよを以前から恋慕していた右大臣具親がかほよの奪取を条件に、高師直の主君足利直義への征夷大將軍

の綸旨を約束する。高師直はかほよが自分に従うことで直義の將軍職の望みが絶てば直義の悪心も修まるだろうと考える故に、その計画を妨げようとしてかほよを奪うという。その後は高師直は不義ではない証拠としてかほよの髪を切り、彼女を帰す。則ち、『尊氏將軍二代鑑』は人妻横奪事件に裏事情を書き加えたことにより、高師直の行為を正当化している。その結果、高師直の人妻横奪行為は私的欲望ではなく、主君の悪心を収めるといふ公的要求に起因する不本意的行為となってしまう。

『狹夜衣鴛鴦劍翅』においては、高師直は塩冶判官の妻かほよの湯上り姿を覗いて恋煩いになり、恋文までを送って、最後は彼女を奪って自分の館に連れ帰る。その行為の理由について、高師直はかほよに以下のように説明する。

さんぬることふぢしまのたたかひに。ふりよによしさだながれやにあたりごしようがいのせつ。御くびたまはらんとかけゆきしに。そのほうかたきながらも。見こみ有るさむらいたのむ事あり。我がくびにかけたるにしきのふくろに。なんていのりんし有り。ひそかにこうとうのないしへわたしくれよ。かならずひとづてにいたしくれなとくれぐれのおたのみ。それとしれなばふた心といはれんと。ふう婦の間もふかくかくし。れんぼに事よせふぎにまぎらし。じきにおわたし申さんため。(『狹夜衣鴛鴦劍翅』第三「師直館の段」)

高師直は新田義貞を討ち取った時に、最期を遂げた新田義貞に綸旨の入った錦の袋を義貞の妻勾当内侍に渡すと頼まれる。かほよの湯上り姿を覗くことも恋文を送ることも、かほよの正体は勾当内侍であると察して確認するための行動である。彼女を奪って自分の館に連れ帰るのも、他人の疑いを招かない上で、新田義貞の錦の袋を勾当内侍に渡すためであるという。最後にも、高師直は彼女を帰す。つまり『狹夜衣鴛鴦劍翅』にも人妻横奪事件に裏事情を増補

することにより、高師直の行為を正当化する筆の取り方が見える。結果的に、高師直の人妻横奪行為は他人の遺願を叶わせるという善意に起因するカモフラージュ的の本意的な行為となってしまう。無論、その中には、並木宗輔の一貫した高師直のために弁護した立場が読み取れるであろう。

「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」においては、重い権勢で人に妬まれ、禍を生む危険があると反省して、高師直は酒色に耽るようになる。高師直は美女を集めて諸大名・諸国守にも依頼して美妾を迎え入れて、彼の機嫌を取るために、各地の長官は当地の美女を求め、彼の下に送る。とは言え、高師直はそこに額田次郎左衛門の婚約者である勝子が入ったことを知らなかった。偶然に出会った額田次郎左衛門から実情を聞けば、高師直は翌日に勝子を帰して、額田次郎左衛門に左のように謝罪する。

備が昨日のものがたりを聞きしより、惻然としていたましく、食もくだりかねたり。備に久曠の歎あらしめたるは、偏に我が罪なり。(中略) 今日吉日なり。それがし媒人をなし、足下の婚を完うすべし。(『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」)

高師直は自分の過失を認めた上で、仲介人として二人の縁談を完成させるという。このように、都賀庭鐘も人妻横奪事件に裏事情を補筆して、高師直の行為を正当化している。結果的に、高師直の人妻横奪行為は「自分が他人の人妻を意欲的に奪う」という主観的行為ではなく、知らずにさせられる本意的な行為となってしまう。

このように、『太平記』には高師直が意欲的に他人の妻を奪うことが彼の私的欲望に起因する主観的悪意的行為として記されているのに対して、『尊氏将軍二代鑑』、『狭夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」は人妻横

奪事件に裏事情を増補して、高師直の行為を正当化している。詳しく言えば、『尊氏將軍二代鑑』には人妻を奪うのは主君の悪心を収めるためのであり、『狹夜衣鴛鴦劍翹』には人妻を奪うのは彼女の夫の遺願を叶わせるためであり、「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」には人妻を奪うのは知らずにさせられることである。則ち、この三つの作品において、人妻或いは他人の婚約者を奪うのは高師直の不本意的な行為となる。また最後に高師直は人妻或いは他人の婚約者を帰すという善後策も書き加えられた。

総じて言えば、『尊氏將軍二代鑑』、『狹夜衣鴛鴦劍翹』と「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」には悪玉から善玉へという高師直像の反転現象が確認できる。さらに、その反転を成立させる方法という点においても、三つの作品は共通している。具体的に言えば、いずれにも逆臣から忠臣へという反転と人妻横奪事件の解釈上の反転が見える。つまり、この三つの作品間の共通性は、悪玉から善玉へという反転の「表象」に現れてくるのみならず、その「表象」の背後の「成立方法」にも見えるのである。

前にも触れたが、『尊氏將軍二代鑑』と『狹夜衣鴛鴦劍翹』は、当時大坂にも名高い歓楽街道頓堀にある豊竹座で初演された浄瑠璃作品である。従って、両作は正に一七一八(享保三)年に大坂に生まれた都賀庭鐘の身近な劇作品と言える。さらに、早稲田大学演劇博物館所蔵『尊氏將軍二代鑑』七行本の刊記に版元は「(大坂) 正本屋九左衛門」とあり、早稲田大学演劇博物館所蔵『狹夜衣鴛鴦劍翹』七行本の刊記に版元は「正本屋 西沢九左衛門」とある。いずれも近世初期に大坂で活躍した豊竹座関係の浄瑠璃正本出版に携わった西沢一風を指すものである。つまり、『英草紙』以前に、両作の脚本がすでに大坂で刊行されていた。それ故に、都賀庭鐘が『尊氏將軍二代鑑』或いは『狹夜衣鴛鴦劍翹』を演劇か刊本の形式で享受したことは十分にあり得る。そのことから、「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」における高師直像の成立の背後に、並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』或いは『狹夜衣鴛鴦劍翹』の

影響があつたと考えられるのではないだろうか。

四、都賀庭鐘作品における浄瑠璃の位置付け

そもそも都賀庭鐘が当時の浄瑠璃に相当の関心を持っていたことは、『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして嫁をなす話」以外の作品にも瞥見できる。

まず、『英草紙』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」には、主人公である紀任重が陰司で閻魔王の代わりに、安徳天皇と二位尼との訴訟を裁判した時に、以下のように述べている。

我思ふに、外戚清盛の計にて、安徳君の女体成る事をつみかくして、男宮の披露して、位に即けたるもの故に、人手に渡し奉りては、女体あらはれ、平氏の罪重く、後生の議論を恐れて、是をかくさん為、俱に沈め奉るならん。(『英草紙』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」)

都賀庭鐘は第五篇に安徳君が女体であることを書き加えたという。その安徳天皇女体説については、中村幸彦氏は一七四七(延享四)年に初演された大坂竹本座浄瑠璃『義経千本桜』二段目に「父清盛、外戚清の望あるによつて、姫君を御男宮といひふらし、権威を以て御位に即け」とあることを指摘し、両作の類似性を示している⁽¹⁷⁾。同篇に源義経の兵法の師である鬼一法眼の姓を「吉岡」としたのも、一七三一(享保十六)年に初演された大坂竹本座浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』によることも、中村幸彦氏によつて明らかにされている⁽¹⁸⁾。『英草紙』の以外に、『四鳴蟬』に収

録された「移松記」は一七一八(享保三)年に大坂竹本座で初演された浄瑠璃『山崎与次兵衛の門松』道行の部分の中国戯曲風漢訳であり、同書に収録された「囃記」は一七二三(享保八)年に大坂竹本座で初演された浄瑠璃『大塔宮囃記』三段目の部分の中国戯曲風漢訳である¹⁹⁾。さらに、都賀庭鐘は『三国志演義』を浄瑠璃に仕立て直して『呉服文織時代三国志』を著した。このように見れば、都賀庭鐘の作品と浄瑠璃との緊密な関係が首肯されよう。それを踏まえて、都賀庭鐘が並木宗輔の太平記物浄瑠璃を大坂豊竹座によって受容したとしても不思議ではないであろう。注意すべきことは、都賀庭鐘の読本に限って言えば、浄瑠璃の表現を受容した例は未だに見当たらないということである。『英草紙』序文において、自分の作り出した新しい文体則ち読本の文体について、都賀庭鐘は以下のように言及した。

風雅の詞に疎きが故に、其の文俗に遠からず。草沢に人となれば、市街の通言をしらず。幸にして歌舞妓の草子に似ず。(『英草紙』序文)

「歌舞妓の草子」とは、当時に世上に行われた、歌舞伎・浄瑠璃に取材した時代物浮世草子を指すと思われる。それらの時代物浮世草子は歌舞伎・浄瑠璃の人氣を利用し、その趣向・構成を借りて、演劇調の長編小説化したものである。傍線部で示した一文には、正に都賀庭鐘の時代物浮世草子の文体からの脱却を意識したことが読み取れる。それについての詳細は、丸井貴史氏の論に譲る²⁰⁾。つまり、『英草紙』において都賀庭鐘は物語の素材という内容的な面では屢々浄瑠璃を参考にしたが、表現という文体的な面ではそれを排斥したのである。

因みに、『尊氏將軍二代鑑』『狹夜衣鴛鴦劍翹』の以外に、並木宗輔の太平記物浄瑠璃にはもう一つ作品がある。

一七四八（寛延元）年に大坂竹本座で初演された『仮名手本忠臣蔵』である。それは赤穂事件を『太平記』巻二「塩治判官讒死事」に仮託した高師直の悪行譚を中心とした浄瑠璃である。都賀庭鐘がそれを意識したかどうかは不明であるが、高師直を善玉として描く『尊氏將軍二代鑑』『狹夜衣鴛鴦劍翹』などの構想を借りた『英草紙』は『仮名手本忠臣蔵』初演の翌年に出版されたことは興味深い。

五、都賀庭鐘の翻案方法

最後に、『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」に現れてきた都賀庭鐘の翻案方法を振り返ってみた。

まず、都賀庭鐘が本話に高師直を裴晋公に当てた必要性について検討する。「裴晋公義還原配」において、裴晋公は戦功で晋国公という高位に至る。「国公」とは実務と関係のない階層規定としての「爵位」である。唐代の爵位制度によれば、「国公」の上には親王があるが、それは皇室の人でなければ封ぜられない故に、従一位である「国公」は当時人臣として封ぜられる最高位と見てもよい。この意味で、都賀庭鐘は足利尊氏の右腕といえるほど幕政を統括する権力を持った執事高師直を選んで、裴晋公に当てたのは妥当なことであろう。とは言え、論じてきたように、都賀庭鐘が「裴晋公義還原配」を翻案し「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」を撰した時に、並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』『狹夜衣鴛鴦劍翹』を参考した蓋然性が極めて高い。

ならば『尊氏將軍二代鑑』『狹夜衣鴛鴦劍翹』を選び取った必然性がどこにあるのであろうか。『英草紙』には粉本の中国側の人物に類似した日本側の人物を当てるという都賀庭鐘の使いこなした翻案方法が見えるのである。例えば、

『英草紙』第三篇「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」において、都賀庭鐘は粉本「俞伯牙捧琴謝知音」の「俞伯牙」に「豊原兼秋」を当てた。俞伯牙は中国春秋時代の晋の大夫かつ古琴の名人であるのに対して、豊原兼秋は『太平記』と『体源抄』に見える、日本南北朝時代に笙を相伝した豊原家に属する実在の楽人である⁽²¹⁾。さらに、『英草紙』第四篇「黒川源太主山に入つて道を得たる話」に、都賀庭鐘は粉本「莊子休鼓盆成大道」における「莊子」に「黒川源太主」を当てた。莊子は「身を分ちて形を隠し神に出でて變化せる」道術を使える人であるのに対して、黒川源太主は『元亨釈書』と『本朝神社考』などに見える呪術者である⁽²²⁾。「裴晋公義還原配」に描かれた他人の婚約者を帰す裴晋公と『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翅』に描かれた人妻を帰す高師直との間にもそのような関係が捉えられる。「裴晋公義還原配」には、裴晋公は各地の長官にむりやりに美女を送られて、他人の婚約者も奪い送られたことを弁明すれば、すぐにその女を帰す。「原配」とは元の婚約者という意味である故に、「還原配」とは他人の婚約者を帰す行為を指す。タイトル通りに、「他人の婚約者を帰す」という趣向は正にこの一話の中核をなすものと言える。それ故に、「裴晋公義還原配」を翻案するに、それとほぼ同じ「主人公が不本意ながら人妻を一時に奪うがすぐに帰す」趣向が見える『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翅』は、正に優れた素材となるのであろう。そのような類似した趣向は、都賀庭鐘の翻案のきつかけとなったと考えられる。

もう一つ注意すべき点は本話に都賀庭鐘が太平記物浄瑠璃と中国白話小説とを結びつけたことである。従来の『英草紙』における『太平記』受容研究は、殆ど『英草紙』と『太平記』諸伝本との関係をめぐって進められてきた。例えば、中村幸彦氏が『英草紙』を注釈した時に使ったのは流布本系『太平記』である。また、川田真輝氏は『英草紙』第三篇を考察し、都賀庭鐘が流布本系『太平記』に加え、天正本系をも熟読し利用したことを指摘している⁽²³⁾。とは言え、当時の都賀庭鐘の周りにあったのは、決して『太平記』諸伝本のみではない。当時の『太平記』の風靡により、

『太平記』の注釈書・評判書・舌耕文芸などの派生作も盛んに作られた。論じてきたように、『英草紙』には『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翹』のような太平記物浄瑠璃の影響も見える。それ故に、今後は『太平記』諸伝本のみならず、その派生作をも視野に入れて、『英草紙』と「太平記物」（『太平記』とその関係作）との関係を俯瞰しなければならぬ。

但し、太平記物と中国白話小説との結び付けを都賀庭鐘から始まったものとしては早計である。彼以前に刊行された『太平記演義』には既に『太平記』と中国白話小説と結び付けが見える。一七一九（享保五）年刊の岡島冠山撰『太平記演義』は五巻五冊で、『太平記』巻一から巻九までを中国白話小説風に漢訳したもので、本文を上下二段に分け、上段に白話文の漢訳で、下段に「通俗」と称する国訳（日本語訳）を記す。丸井貴史氏が指摘したように、その『太平記』を演義小説の形式に再構成するという発想は『英草紙』の成立に影響を与えた可能性も否定できない⁽²⁴⁾。しながら、岡島冠山と都賀庭鐘のやり方には大きな相違が見られる。

第一は底本選択上の相違である。丸井貴史氏によれば、岡島冠山は『太平記』流布本や太平記読みの種本『太平記秘伝理尽抄』ではなく、学問性が強い『参考太平記』を底本として、『太平記演義』を一つの学問的営為として著した⁽²⁵⁾。それに加えて、氏は以下のように指摘している。

『太平記演義』が成立した十八世紀初頭における『太平記』受容のあり方、秘伝書としての性格を有しつつも娯楽性を交えた記述を含む『理尽抄』に代表される流れと、それとは対照的に実証性を重視する『参考太平記』に代表される流れとに大別できる。

十八世紀半ばに成立した『英草紙』において、都賀庭鐘は複数の『太平記』伝本系統のみならず、『尊氏將軍二代鑑』『狹夜衣鴛鴦劍翹』などの太平記物語浄瑠璃をも利用した。その多方面の素材を生かしたことは、小説の新鮮味への配慮によるものと考えられる。このように、『参考太平記』を底本とした『太平記演義』は実証性を重視する『太平記』受容の流れにあるとすれば、当時の浄瑠璃の趣向をも書き込んだ『英草紙』は正に娯楽性を持つ『太平記』受容の流れにあると言える。底本の選択に正に作者の自覚的な方法論が反映されている。その中に、学者としての岡島冠山と小説家としての都賀庭鐘との面影も対照的に現出する。

第二は結びつけの方法の相違である。『太平記演義』において創作的要素が皆無ということでもない⁽²⁶⁾が、全体的に異国語である白話で再構成するという「翻訳」の作業に重きが置かれている。翻訳である以上、表現としての白話に代表される「漢」と内容としての『太平記』に代表される「和」との境界線は徹底的に意識されているはずである。換言すれば、「漢」⇨他者と「和」⇨自者との抵抗が『太平記演義』の基底に見定められる。下段に『太平記』の本文ではなく、白話訳の日本語訳を付することも、その抵抗に起因する距離感をできるだけ読者に感じさせない為の措置である。とは言え、その措置にはかえってその抵抗をさらに強く示すという副作用を伴う側面もある。それに対して、都賀庭鐘は『英草紙』において白話表現を取り入れながら和漢雅俗混雑的な文体を取った上で、内容的にも中国白話小説の世界と『太平記』の世界を折衷することに取り組んだ。その中に「漢」⇨他者と「和」⇨自者との融合が捉えられ、『太平記演義』に明らかに見える「漢」⇨他者と「和」⇨自者の境界線もここに曖昧になった。つまり、岡島冠山の結びつけは「漢」と「和」の分立によって成立するものとすれば、都賀庭鐘の結びつけは「漢」と「和」の融合を通して遂げたものと言える。中国白話小説受容という視座からみれば、岡島冠山に比べて、都賀庭鐘の方法はさらに一步を踏み込んだと首肯されよう。

終わりに

本稿では『英草紙』第九篇「高武蔵守婢を出だして媒をなす話」に現れてきた「悪玉から善玉へ」という高師直像の反転問題を提起することにより、『英草紙』第九篇と当時の並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翹』との影響関係をできるだけ明らかにし、この一話にみる都賀庭鐘の翻案方法の解明を試みた。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、従来都賀庭鐘の改編と思われた『英草紙』第九篇にみる「悪玉から善玉へ」という高師直像の反転は実際に都賀庭鐘の発明ではない。その趣向は当時の並木宗輔の太平記物浄瑠璃『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翹』から受容したものである可能性が極めて高い。

加えて、都賀庭鐘は物語の素材という内容的な面では浄瑠璃を参考にしたことがあるが、表現という文体的な面では都賀庭鐘はそれを排斥した。その中に都賀庭鐘の新しい文体を徹底的に追求する執筆姿勢が捉えられる。

また、都賀庭鐘が翻案した時に、『尊氏將軍二代鑑』『狭夜衣鴛鴦劍翹』における高師直を「裴晋公義還原配」における裴晋公に当てたのは、これらの作品は「主人公が不本意ながら他人の婚約者或いは人妻を一時に奪うがすぐに帰す」趣向が見える点に共通しているからである。粉本の中国側の人物に類似した日本側の人物を当てるという翻案方法は、『英草紙』に収録されたほかの作品にも見える。

さらに、中国白話小説と『太平記』との結びつけは決して都賀庭鐘から始まったものではない。彼以前の岡島冠山が撰した『太平記演義』には、そのような結びつけが既に現れた。とは言え、太平記物と中国白話小説との結び付け

に見る二人の方法論は根本的に異なっている。岡島冠山の結びつけは実証性・学問性の強い底本を選択し、「漢」と「和」の分立によって成立するものである。それに対して、都賀庭鐘の結びつけは娯楽性の強い素材を利用し、「漢」と「和」の融合を通して遂げたものと言える。

以上、『英草紙』第九篇の新しい出典の可能性を検討し、それを通して都賀庭鐘の翻案方法を垣間見た。論じてきたように、日本近世における中国白話小説受容史において、太平記物は重要な役割を果たしてきた。岡島冠山の『太平記演義』から都賀庭鐘の『英草紙』までは、無関係しているように見える中国白話小説と日本太平記物は一時期に共存し絡み合ったのである。ながらも、都賀庭鐘以後の状況は未だに不明のままである。今後中国白話小説受容史という通時的視点で、太平記物の意義と位置づけについて追及したい。また、中国文学との関係を考えることが、今日なお読本研究の本流である⁽²⁷⁾。しかし、異文化間の文化移植を遂げる翻案文学である読本の本質を捉えるには、中国文学のみならず、太平記物のような日本文学をも考えに入れるべきである。中国文学との関係を一方の車輪、日本文学との関係を他方の車輪として、その両輪で補い合って翻案文学である読本の本質に迫り続けなければならない。

〔注〕

- (1) 山口剛「読本の発生」、『山口剛著作集』第二巻(中央公論社、一九七二年)所収。
- (2) 丸井貴史「初期読本と浮世草子…白話小説利用法からの検討」、『和漢比較文学』(65)所収、二〇二〇年八月。
- (3) 中村幸彦・高田衛・中村博保校注『英草紙』西山物語 雨月物語 春雨物語(新編日本古典文学全集第78巻、小学館、一九九五年)、第176頁。
- (4) 具体的な解説は前掲『英草紙』西山物語 雨月物語 春雨物語『の中村幸彦氏による注釈に詳しい。

- (5) 谷垣伊太雄「高師直考——『太平記』を中心に——」、池上洵一編『論集 説話と説話集』（和泉書院、二〇〇一年）所収。
- (6) 和田琢磨『『太平記』生成と表現世界』（新典社、二〇一五年）、第377頁。
- (7) 青木晃「武蔵守師直の悪者像——太平記の文学的形象とその一つの享受」、『国文学』（53）所収、一九七六年十二月。武田昌憲『『太平記』と北野——高師直一族悪行譚の一側面——』、『説話文学研究』（30）所収、一九九五年六月。
- (8) 同注（1）。
- (9) 前掲『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』、第592—593頁。
- (10) 井上泰至『近世刊行軍書論』（笠間書院、二〇一四年）、第250頁。
- (11) 丸井貴史「都賀庭鐘『英草紙』の研究史と展望」、『上方文藝研究』（14）所収、二〇一七年。
- (12) 長谷川端・梶原正昭・栃木孝惟・山下宏明編『太平記の世界』（汲古書院、二〇〇〇年）、第297頁。
- (13) 加美宏『『太平記鈔』について』、『『太平記』研究史の一章』、『同志社国文学』（29）所収、一九八七年三月。
- (14) 大橋正叔「太平記読と近世初期文芸について——『太平記』の享受から」、『待兼山論叢』5（文学篇）所収、一九七二年三月。
- (15) 黒石陽子『『仮名手本忠臣蔵』における刃傷事件脚色の方法——小栗から『太平記』へ』、『東京学芸大学紀要』第2部（48）所収、一九九七年二月。
- (16) 角田一郎・内山美樹子校注『竹田出雲 並木宗輔 浄瑠璃集』（新日本古典文学大系93、岩波書店、一九九一年）、第549頁。

- (17) 前掲『英草紙』西山物語 雨月物語 春雨物語、第105頁。
- (18) 前掲『英草紙』西山物語 雨月物語 春雨物語、第111頁。
- (19) 稲田篤信・木越治・福田安典編『都賀庭鐘・伊丹椿園集』(江戸怪異綺想文芸大系2、国書刊行会、二〇〇一年)、第761頁。
- (20) 同注(2)。
- (21) 前掲『英草紙』西山物語 雨月物語 春雨物語、第21頁。
- (22) 同前注。
- (23) 川田真輝『『英草紙』第三篇の後醍醐帝批判・庭鐘の『太平記』利用に即して』、『国文学攷』(253)所収、二〇二二年十二月。
- (24) 丸井貴史『白話小説の時代——日本近世中期文学の研究——』(汲古書院、二〇一九年)、第167頁。
- (25) 前掲『白話小説の時代——日本近世中期文学の研究——』、第160頁。
- (26) 湯沼誠二『岡嶋冠山研究——3——』、『太平記演義』の位相、『国語国文研究』(49)所収、一九七二年四月。中村綾『『太平記演義』訳解の方針』、中村綾著『日本近世白話小説受容の研究』(汲古書院、二〇一一年)所収。
- (27) 近藤瑞木『前期読本研究の現在』、『読本研究新集』第七卷所収、二〇一五年。

〔付記1〕本稿における『太平記』の本文引用は、都賀庭鐘が活躍した時代に近い慶長八年古活字本を用い、現存古活字本ならびに整版本の主要なものを以て校訂を加え、流布版の原初的な形態を再現した日本古典文学大系第34巻『『太平記』』(後藤丹治・金田喜三郎校注、岩波書店、一九六一年)に拠る。『英草紙』の本文引用は新編日本古典文

学全集第78巻『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（中村幸彦・高田衛・中村博保校注、小学館、一九九五年）に拠る。『尊氏将軍二代鑑』の本文引用は義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集第五巻『尊氏将軍二代鑑』（鳥越文蔵監修、義太夫節正本刊行会編、玉川大学出版部、二〇〇六年）に拠る。『狭夜衣鴛鴦劍翹』の本文引用は新日本古典文学大系93『竹田出雲 並木宗輔浄瑠璃集』（角田一郎・内山美樹子校注、岩波書店、一九九一年）に拠る。引用に際しては適宜句読点を改め、左訓を省略し、傍線と括弧を施した。

〔付記2〕本稿は、第47回国際日本文学研究集会（国文学研究資料館主催、令和六年五月）における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。木越俊介教授、ジョナサン・ズイッカー准教授など席上でご教示をくださった方々に心より感謝申し上げる。